

# “人物”を学んで知る 読書は貴重な出会いの場

「本がないと寝付けない」

と語るほど読書に愛着を持っているのが縄文アソシエイツ社長の古田英明氏(55)。社長デスクには安岡正篤をはじめとする思想や哲学の書籍がズラリとならんでいる。

「宇宙一三七億年、地球四五億年、生物三八億年、人間の歴史、文明、文化、宇宙を超えると宗教になり、哲学になる。これらのどこかの切り口が、人の興味の範囲ということでしょうが、私はその各々に興味があるんです」

古田氏の別名は「カリスマヘッドハンター」。その仕事柄、リーダー論に対する知識には貪欲だ。「リーダーとはいかにあるべきか」「人はいかに生きるべきか」というテーマは、プライベートの時間でもある読書の際にも顔を出す。

そんな古田氏は、ほかの人のおススメ本を読むことが多いのだという。今回紹介してくれた『代表的日本人』(内村鑑三著 岩波文庫)もその一冊だ。



社長デスクには本がずらりと並ぶ。

「自分で選んで『あッ』と思うこともありますが、人から勧めてもらった本を参考にすることが多いです。感じる場所があつて勧められるわけですから。」

私は、リーダーとは何かを考える時に、日本人とは何か、を一緒に考えることが多いんです。この『代表的日本人』は、日本人はこういう

「シップについて常に考えているため、何度読んでもそのたびごとに新しい発見がある。イチオシのお勧めですね」

この『代表的日本人』は内村鑑三によつて一九〇八年に刊行された英文著作『Representative Men of Japan』の翻訳が、いまから一〇〇年以上も前に著された日本人像である。内村鑑三が選

んだ日本人は、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮の五人だった。

古田氏にとって、この本から受けた影響は大きく、自らの著書『カリスマヘッドハンターが明かす リーダーの条件』(天和書房)は、『代表的日本人』の「解題のようなもの」と

位置づけている。著書のなかでも「つまらない経営書を読むくらいなら、これを繰り返し読んだほうがずっと価値がある」として、『代表的日本人』を武士道精神を学ぶ入門書として挙げるほど思い入れが深い。

「何十年、何百年と読まれてきた本は、いろんな人が感動したから残されているわけで、自分の心にも響くものが多いはずですよ。人はいかに生きるべきか、というものは、古いもののほうが歴史の風雪に耐えているから価値がある。二五〇〇年前に書かれた『論語』と現在の本とでは価値のレベルが違う。読んだわけではないですが、『聖書』や『般若心経』なども読んでみるとおもしろいかもしれませんね」

古田氏にとって、読書とは何か。あらためて聞いてみた。

「人間を成長させるのは『出会い』です。我われのような仕事、一人ひとりの方と濃密な時間を過ごすヘッドハンターですら、会えるのは年間約一〇〇〇人。そのうち、何かを教えていただけのような出会いは数人です。私は人物に関する書物が好きなのですが、本ならかなりの確率で、これはという人に会える。本を通じて何百人という方に会い、哲学や考え方を教えていただくというのは、すばらしいメリットだと思います」

**B**